



肺がんを中心に 胸腔鏡手術による 低侵襲の治療を提供

2018年10月、佐藤先生が部長に就任したことにより、活動が活発化した耳原総合病院の呼吸器外科。その詳細についてお話をうかがった。

手掌多汗症を含め、幅広い 胸部外科領域の手術を担当

診療体制強化を図る耳原総合病院は、松江赤十字病院から佐藤先生を招聘した。就任から期間はわずかだが、呼吸器外科の実績は着実に積み重ねられている。「現在専任の医師は私一人ですが、他科と連携して手術や診療に当たっているため、円滑な医療の提供ができています。呼吸器外科では肺がんを中心とした悪性疾患をはじめ、胸部外科領域の手術を幅広く担当。大半の手術を胸腔鏡を用いて行い、身体的な負担が少なくなるよう心がけています」と、先生は語る。また、「見呼吸器とは関連が薄そうなの、手のひらに汗が多く出してしまう『手掌多汗症』の治療も行っているという。『手のひらの発汗を支配している交感神経は胸部にあり、これを遮断する手術は当科で行っています。この手術は胸腔鏡で行われ、傷は脇に1cm程度の穴を開けるだけ。手術時間は約30分、概ね2泊で退院できるので、普段から手の発汗がひどくて悩んでいるという方は、一度ご相談いただければと思います」。

難易度の高い縦隔腫瘍も 胸腔鏡手術で対応

「呼吸器の腫瘍には、左右の肺に挟まれた胸部のほぼ真ん中の縦隔と呼ばれる場所に発生するものがあり、それを縦隔腫瘍と呼びます。縦隔腫瘍に罹患している患者さんのなかには、稀に指定難病である重症筋無力症が合併していることがあり、その場合は開胸手術を行うことも多いのですが、大きな傷が残ってしまう。当科ではこうしたケースであっても、可能な限り胸腔鏡での手術を行い、負担の軽減を目指します」と、佐藤先生は語る。難症例でも低侵襲の治療が望め、患者さんにとっては頼もしい限りだ。



週一度のペースで行われている手術は、そのほとんどが胸腔鏡によるもので、経験値が高い。



1.手術の際は、他科の医師や看護師と緊密に連携を取り、なるべく身体への負担が少ない手術を目指す。2.患者さんの不安を取除くため、なぜ手術が必要なのか優しく丁寧に説明を行う佐藤先生。